新潮文庫

パニック・裸の王様

開高　健著

新潮社

新潮文庫 草128

昭和三十五年六月二十五日 発行
昭和四十五年二月二十五日 十二刷

著者 開高健

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Ken Kaikō 1960 Printed in Japan

新潮文庫

パニック・裸の王様

開高　健著

1394

目次

パニック……七
巨人と玩具……六三
裸の王様……一一九
流亡記……一九五
解説　佐々木基一　一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

パニック・裸の王様

パニック

一

飼育室にはさまざまな小動物の発散するつよい匂いがただよっていた。その熱い悪臭はニンクリートの床や壁からにじみでて、部屋そのものがくさって呼吸をしているような気がした。いくつもの飼育箱は金網やガラス戸がはめられ、鍵がかけられてあったが、動物の尿は箱からもれて床いちめんに流れていた。入口からさした光線と人間の気配に動物たちはいっせいにざわめきだした。どの箱でもとじこめられたけもののたてる足音や金網をひっ掻く爪音がさわがしく起った。

「餌不足でね、連中飢えてるんでサ」

俊介と課長のさきに立った飼育係が説明した。彼は手にネズミの入った金網の籠をさげていたので、けものたちは彼が箱の前を通ると金網の内側をいそがしく走りまわった。どのけものもやせこけてけわしい体つきをしている。毛は汚物でぬれ、かたまって針のようにとがっていた。そして、たいてい体のどこかに赤い傷口をもっていた。山でワナにおちたとき、鋼線が食いこんだのである。彼らはせまい箱のなかをせわしく往復し、鼻を鳴らし、金網に前足をかけてネズミの籠を見送った。

「よくなれてるんだね」

課長はキツネが猫のように媚びたしぐさで首を金網にすりつけるのを見て、ものめずらしげにつぶやいた。

イタチの箱の前まで来て俊介は立ちどまった。彼は課長に説明した。

「こいつは、まだ山から来たばかりで、なれていないんですよ。猜疑心の深い奴でね、人の足音がしただけでかくれてしまいます」

箱の床には砂がしかれ、糞がいくつもころがっていた。砂には小さな足跡がいちめんについていたが、居住者の姿はなかった。

「どこにいるんだい？」

「巣箱にかくれてるんです。ネズミでおびきだしてみましょう」

彼は飼育係の男に籠のネズミを五匹とも全部箱のなかへ入れるようにいいつけた。そして、窓のブラインドをおろして電燈を消すようにと指示した。

「奴は気むずかし屋で、おぜんだてがうるさいんでサ」

飼育係は課長に説明しながら、ネズミを一匹ずつ籠からつまみだして砂の上においた。ネズミは小きざみにふるえつつ小さな顔をおしつけて砂の匂いをかいだ。早くも恐怖を察したのか、彼らはよちよちと箱の隅に行くと、五匹ともかたまって動こうとしなくなった。俊介は課長に声をかけた。

「少し離れていましょう」

「人間の匂いがしてもいいのかい？」

「腹がへってるから、それぐらいはあきらめているでしょう。暗くしてやればでて来ますよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼は課長をさそって箱から離れると、窓ぎわにならんで立った。

飼育係が窓の蔽いをおろして電燈を消すと、部屋のなかはまっ暗になった。ふいに夜の野の気配が室内にみなぎり、あちらこちらでけもののさわぐ物音が聞こえた。いくつものやわらかい足が暗がりを駈け、木がむしられたり、牙の鳴ったりする音が闇を占めた。

電燈を消して三分とたたないうちに、とつぜん身近の暗がりを小さな足音が走った。それは非常な速度で砂を蹴って駈け、ほとんど体重というものを感じさせなかった。それにつづいてするどい悲鳴と牙音が起ったが、さわぎはまたたく間に終ってしまった。俊介は満足感をおぼえて、小さく息をついた。

課長が耳もとでささやいた。

「やったナ」

「……そうらしいですね」

飼育係は有能な男だった。ネズミの悲鳴がやんだところですかさず電燈のスイッチを入れたので、いままさに餌をくわえてとぼうとしていたイタチの全身がそのまま明るみにさらけだされた。まるい、小さい頭を起して彼は部屋の隅にたたずむ二人の男を発見した。つぎの瞬間、砂の上を黄いろい炎がかすめた。音もなくイタチの姿は巣箱に消えた。

「たいした早業だ、みなごろしじゃないか！」

箱に近づいてなかをのぞきこんだ課長が感嘆の声をあげた。

ネズミは四匹しかのこっていなかったが、いずれも白い歯を見せ、足をちぢめてころがっていた。砂には二、三滴の血がこぼれているが、どこに傷があるのか、まったくわからなかった。ゼ

ンマイのこわれた灰色のおもちゃといった様子で殺されている。これはいつもの手だ。この優美な残酷さには山で何度もお目にかかったことがある。その身ごなしのしなやかさについては忘れられぬ記憶がある。去年の秋、俊介は高原のササ原で一匹のイタチに出会ったことがある。ふだんは用心深い夜行性のこのけものが、そのときはなにを思ったのか、白日の下に全身をさらして、広い野原を飛ぶように走っていた。倒木をとびこえ、草むらにもぐり、まるで小さな火のようにキラめきつつ、彼の姿は見る見る視界のかなたに消えていった。見わたしたところ、空にも野にも、彼を襲う敵の姿はないようだったし、彼のさきを走る獲物の影も見当らなかった。俊介には習性に反したその行動の原因がつかめなかったが、何日ものむだな調査旅行に疲れていた彼は、目的もなく全速力で疾走するこのけものにある友情と新鮮な緊張感をおぼえて、いつまでも後姿を見送ったものだった。それからというものは、イタチを見れば、きまってこのササ原の孤独な走者を思いだす。

飼育係は砂の上にころがったネズミをひろい集めると、一匹ずつほかの箱の動物に配った。ネズミはたちまちかみくだかれ、腸がはみだし、肉はボロぎれとなってしまった。

「イタチの奴、食わんじゃないか」

課長が不平そうにつぶやいた。

「人声がするんで、警戒しているんでしょう」

俊介は課長に説明して箱の前を離れた。二、三歩行くと、はたして背後でひそやかに骨のくだける音がした。立ちどまるとその音は消え、歩きだすとふたたびはじまった。イタチの狷介さに俊介は微笑をうかべた。

（……いつまでつづくかな）

彼は声をかけようとしてなにげなく課長をふりかえったが、そのまま顔をもどして口をつぐんだ。課長は髪の薄くなった頭を掻き、小指の長い爪にたまったあぶらをはじくことにこころを奪われている様子だった。イタチもやがて飼育係の足音で金網のなかを糞まみれになって走りまわるようになるだろう。飼育室を出るとき、ふと俊介は日頃なじみ深い倦怠の軽い死臭がもどって来るのを感じた。

部屋にもどると土曜の午後なので、もう誰ものこっていなかった。机には地方の派出所から来た日報がのっていた。三つの県の各地方からのものだが、二、三日来の大雪で汽車がとまったために日付のおくれたのもまじっていた。どの報告書にもたいしたことは記されていない。どうせ派出員は山番や炭焼人から聞いた噂話をそのまま書きこむのだろう。彼は壁に張った県の地図と日付を照合してところどころの村に赤鉛筆で印をつけた。照合を終って課長のところへ持ってゆくと、ろくに読みもしないで判をおされた。いつものことだ。もどろうとすると呼びとめられた。課長は胃がわるいのでひどく口が臭う。出入業者に招待された宴会の翌朝など、まるでどぶからあがったばかりのような息をしていることがある。生温かく甘酸っぱい臭いだ。口だけでなく、手や首すじからもその臭いはにじみ出てくるようだ。白眼の部分にある黄いろくにごった縞を見ると、いつも、この男はくさりかけているなと思わせられる。

課長は俊介にむかって、机のひきだしから厚い書類綴りをだし、軽く投げてよこした。

「君の企画書だ。ずっと前に局長室からもどったんだが、そのままになっていたので返すよ」

課長は背広の襟から妻楊枝をぬきとり、たんねんに歯をせせりながら俊介に説明した。

「前の課長も君の企画を会議に出すことは出したらしいがね、山持ちの県会議員に一蹴されたらしいよ。これは局長も文句をいえやしない。長いものには巻かれろってこったネ」
課長は楊枝のさきについた血をちびちびなめた。俊介は息のかからないように机から体をひき、相手の不潔なしぐさをだまって眺めた。課長はひとしきり歯の掃除をすませると、眼をあげ、日報の綴りをちらりとふりかえってたずねた。
「ネズミのこと、なにか出ているかい？」
「べつに、なにも……」
課長はめんどうげに彼の手から日報をとると、パラパラ二、三枚はぐった。
「特記事項ナシ、例年ト大差ナシか。君の予想とはずいぶんちがうようだな」
「……なにしろ雪ですからね。冬はネズミの動きはめだたないものなんです」
課長は彼の答えに不満らしく頭をふった。
「君、日報は局長室まで行くんだよ。いくらササ原を焼けといったって、現実になにも起っていなかったら、焼こうにも焼きようがないじゃないか。局長だって納得しないのがあたりまえだよ」
俊介はこのあたりでちょっと抵抗してみせるのも手だと思ったので、
「おっしゃるとおりですが、起ってからではおそすぎるんじゃないかとも思ったもんですから」
といった。すると相手はすぐ餌にとびついて来た。課長は回転椅子に背を投げると、俊介の顔をちらりと眺めた。その眼には満足そうな軽蔑のいろがはっきりでていた。課長はきめつけるようにいった。

「当てずっぽで役所仕事ができると思うかね。前例もないのに、君の突飛な空想だけで山は焼けないよ。君の企画はお先走りというやつだ。気持はよくわかるがね」

俊介はその言葉で、いままで自分がどういうふうに見られていたか、あらためて知ったような気がした。彼は発明狂や易者とおなじ種類の人間と考えられていたのだ。

「局長はね、こういうんだ」

課長は両手を組んで机におき、俊介を見あげた。眼からは軽蔑が消え、まがいものの真剣さがのぞいていた。

「……つまり、ネズミは毎年春になるとわくものなんだ。たとえ君が心配しているほどではないにしてもね。それで、一度イタチを山に放してみたらどうかということなんだ。こいつは生きものだからほっておいても繁殖する。毎年補給しなくってもいいから大助かりだよ」

俊介は髪の網目をとおして課長の頭の地肌を眺めた。皮膚はよくあぶらがのって血色がよいが、骨は固くて厚そうだ。その薄暗い内部を小さなけものが黄いろい炎をひいてとんでいるのだ。どんな言葉もそのヒラめきを消すことはできないだろうと俊介は思った。こんなところで争ってもはじまらない。それに、いまはもうすべてが手おくれの段階に来ているのだ。見方を変えると、なにに手をだしてもだしすぎるということのない情勢である。たとえ一匹のイタチでもないよりはましだ。俊介は方向を変えて課長の説を歓迎することにした。

「おっしゃるとおりです。イタチというのはいい考えですよ。あれはネズミとみれば片っぱしから殺してしまいますからね。食う食わんは二のつぎとして、とにかく見つけ次第に殺してしまうんです。小さな島ならイタチを放すだけで完全にネズミ退治ができます」

課長はだまって聞いていたが、話が終ると気持よさそうに小指で頭を掻き、満足げに机をたたいた。

「わかった。あさっての月曜、対策会議を開こう。春になったら、すぐイタチを買い集めるんだ。君、至急、動物業者の名簿を作ってくれ。それから、新聞社と放送局に電話だ。猟友会にもね」

「どうするんです？」

「わからんかね……」

課長は眉をあげ、回転椅子にそりかえった。

「禁猟の指令を流すのさ。イタチだけじゃない。ヘビでもモズでもとにかくネズミをとる動物は全部禁猟ということにして、密猟した奴は厳重処分、つまりイタチの皮の闇値の十倍ぐらいの罰金をかけるんだ。それで万事解決だよ、君」

そういって立ちあがりしなに課長は軽く俊介の肩をたたいた。すっかり得意になっているらしかった。俊介はばかばかしさのあまり手の書類を思わずたたきつけたくなるような衝動を感じたが、なんとかやりすごして表情にださぬよう、顔を窓の方にそむけた。窓外の前庭には雪がつもり、踏み固められてコンクリートのように光っていた。人影はなかったが、ちょうどそのとき一台の高級乗用車がすべりこんで来て、するどくきしみながら氷の上にとまった。待ちかねたように課長が鞄を持って椅子から立ちあがった。

「じゃあ、君、お先に失敬するよ」

とっさに俊介は書類を抱えたまま飛んでゆくと、課長のために部屋の扉をひらいてやった。相手が小走りに通りすぎかけたとき、とつぜん俊介は相手の足をすくってみたい誘惑を感じて、声

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com